

「口承文芸研究からの現代批評」

都市伝説は陰謀する

—二〇〇〇年代後半の「都市伝説」ブーム・走り書き—

飯倉 義之

「都市伝説」が息を吹き返した。

書評誌『ダ・ヴィンチ』は二〇〇七年六月号の特集を「よみがえる都市伝説」と銘打った。

一九八〇年代後半の〈噂〉の流行に、ジャン・ハロルド・ブルンヴァン『消えるヒッチハイカー』の邦訳「新宿書房一九八八」が「都市伝説」の名称を与えた一九九〇年代のブームの後、バブル経済の崩壊とともに逼塞していた「都市伝説」は、二〇〇〇年代半ばから再び脚光を浴びはじめた。

野村典彦が「民話運動と「学校の怪談」」で、コンビニエンスストアで販売される雑誌や、その後に急激な成長を遂げたインターネットが、その語のはらむいかがわしさを表に出しながら、「都市伝説」を増殖させた。「一柳廣孝（編著）『学校の怪談』はささやく」青弓社 二〇〇五・一七〇」

と指摘するように、二〇〇五年頃から「都市伝説」を冠する雑

誌やムック、ペーパーバック、コミック、ゲームが陸続とリリースされ、インターネット上には愛好ウェブサイトも数多く開設されている。

現在の都市伝説ブームには、「真夜中の都市伝説」シリーズを著した松山ひろし「主著に『3本足のリカちゃん人形』イースト・プレス 二〇〇三、ほか」や、アメリカの都市伝説の紹介を得意とする宇佐和通「主著に『三田都市伝説』三部作 新紀元社 二〇〇四〜七、ほか」、ネットで「妖怪王」を名乗る怪異愛好家の山口敏太郎「主著に『怪奇！世にも不気味な都市伝説』河出書房新社 二〇〇四、ほか」らを先頭に、有名無名匿名の多くの発信者が存在する。

また「実話誌」と呼ばれる、ウラ情報をウリとする一群の雑誌も「都市伝説」を特集して読者を多く集めている。

新進の実話誌である『実話GON！ナックルズ』（ミリオン出版）や『実話マッドマックス』（コアマガジン）は、扇情的な写真と見出しを多用する誌面構成で、「都市伝説」や「心霊スポット」や「UFO」といった話題を、裏社会の情報やアイドルの「お宝画像」と同列に取り上げる。その点でヤクザ・風俗情報を主としてきた旧来の実話誌（『実話ドキュメント』『アサヒ芸能』など）とは一線を画す。こうした新進の実話誌を、その誌面の特徴から「ビジュアル系実話誌」と呼んでおきたい。

「ビジュアル系実話誌」はヌードグラビアや風俗体験記事を

含むためコンビニなどではアダルト向けの棚に置かれるが、同誌の特集を再編集したムックやペーパーバックは一般向けの棚にも置かれる。ビジュアル系実話誌が発信する「都市伝説」の読者層は幅広いと思われる。

だが今後のブームの立役者は、なんとといっても「ステイプレン・セシルバーグ」こと関暁夫である。

キャップ・顎鬚・サングラスの「セシルバーグ」は、お笑いコンビ・ハローバイバイの関暁夫が扮する「キヤラ」である。関は以前からトークライブで演じていた「都市伝説」ネタを、深夜バラエティ番組『やりすぎコージー』（テレビ東京）の企画「芸人都市伝説」でオンエアし、知名度を大きく上げた。

関らが「都市伝説」を語る同企画は好評で、DVD・BOXも発売され、二〇〇七年八月にはゴールデンタイムに二時間の特番も放送された。中高生の世代は「セシルバーグ」で初めて都市伝説を知ったといえる。「都市伝説」ネタをまとめた関の著書、『ハローバイバイ・関暁夫の都市伝説』（竹書房 二〇〇六）も三五万部を売るヒットとなった。

同書の副題「信じるか信じないかはあなた次第」は「セシルバーグ」の決め台詞でもある。判断は「あなた次第」、即ち責任は全て聞き手にあるというこの宣言は、メディア側が用意したトラブルへの予防線でもあるだろう。

現行のブームには二つの特徴が指摘できる。まずその一つは、「なんでもあり」という点である。

雑誌『アエラ』連載をまとめた『都市伝説探偵団』（朝日新聞社 二〇〇五）では「生理は伝染する？」「おひな様を片づけないと行き遅れる？」といった俗信が、並木伸一郎「最強の都市伝説」『経済界 二〇〇七』では、アポロ月未到達説や聖書の暗号といった陰謀論や、ジャージー・デビル、モスマンといったUMA（未確認生物）の話題が、児童書『こわーい！都市伝説&怪談DX』（実業之日本社 二〇〇七）では七不思議や心霊写真やこっくりさんまでが「都市伝説」として括られる。一九九〇年代の都市伝説ブームにはあった「友人の友人に起こったとされて広まる、現代の自然発生的な怪談・奇談」という含意は、ここではすでに失われている。

前回の都市伝説ブームは八〇年代末のポスト・モダンの影響下にあった。当時の都市伝説にはあった「ニューアカ」が唱導したような「シラケつつノる」といった距離感が、現在はない。関が決めゼリフで言うように、「都市伝説」は「信じる」べきものなのである。

現在の「都市伝説」に顕著なもう一つの特徴は、強い「陰謀史観」である。これまで「陰謀論」と呼ばれて、流言や口承文芸とは区別されてきたパラノイア妄想的な奇説（いわゆる「トन्दモ本」の世界）までが「都市伝説」の範疇とされ、フィクションとノンフィクションの境の曖昧な（ウワサ）、すなわち「ネタ」として消費されている。

関前掲書では、従来の都市伝説の定番であった「口裂け女」

や「食べ物の秘密」といった題材は重視されず、むしろ軽く扱われる。関の「都市伝説」が力説するのは、世界中の「裏の組織」が阪神淡路大震災をはじめとした大地震を人為的に起こしている」と語る「地震兵器」や、九・一一のWTCへのテロはアメリカの自作自演と述べる「アメリカ策略戦争」「お札の秘密」、アメリカの一部勢力は宇宙人と密約を交わして世界中を欺いているとぶちあげる「電子レンジUFO説」「ケネディと宇宙」などである。

「猫肉バーガー」や「ピアスの白い糸」といったかつての都市伝説が日常レベルの奇談を語っていたのに対し、現在の「都市伝説」はアメリカの世界戦略やフリーメーソンの陰謀といった、国家レベル、国際企業レベルの陰謀論を語る。「都市伝説」の受け手たちは、「世界の〈現実〉^{リアル}は国家や企業や闇の勢力に巧妙に隠蔽されており、自分たちは騙されている」という被害者の立場に自らを置く。関掲掲書の最終節の題名は「シナリオ通りの世の中」。これがまさに「都市伝説」ファンの気分であるだろう。ここでの「都市伝説」は「陰謀論」という大きな「話型」に沿うことで、読者が現在の社会に対して漠然と抱いている不満や不安と、そこから発生する攻撃性を焦点化し、そうしたリサンチマンの発露の受け皿として機能している。

こうした心性は「嫌韓・嫌中」を標榜する青年層や、インターネットの「祭り」でブログを「炎上」させるなど他者を執拗に攻撃する「ネット右翼」（必ずしも右翼的思想を必要としない

という意味で「ネットイナゴ」とも呼ばれる）にも通底するものである。

近藤瑠漫・谷崎晃『ネット右翼とサブカル民主主義』「三一書房 二〇〇七」は、「ネット右翼」は決して国粹の心性の持ち主ではなく、変動期にある現在の日本社会で漠然とした不安や不満を抱える「負け組」「負けかけ組」が、攻撃性を焦点化して発露し自己肯定感を得るために、嫌韓・嫌中・愛国の姿勢を選択しているにすぎないことを指摘する。

こうした「都市伝説」の変容には、「我々の眼に見えない社会の闇に真実が隠されている」とする陰謀論的まなざしに無制限の資料と参照枠とを与えるインターネットが強く影響を与えている。先の「ビジュアル系実話誌」はインターネットと親和性の高い印刷メディアであり、「ネタ元」がネットであることを隠さずに、むしろ「火のないところに煙は立たぬ」の論理を用いて「〈現実〉^{リアル}の証拠」として誇らしげに提示する。

インターネット空間では、すべての情報が表層的に、並列に配置される。それは多くの人に開かれたワールドワイドウェブのすばらしい特性ではあるけれども、綿密な取材と丹念な分析を経て練り上げられた署名入りの報告も、ふとした思い付きで匿名掲示板に記された無根拠の書き込みも、まったく等価値の「ネタ」として読まれてしまうということでもある。

情報がすべて等価値の「ネタ」として消費されるとき、どれを〈現実〉^{リアル}として受け止めるかは、情報の論理的妥当性ではなく、

受け手の「好き・嫌い」にまかされる。例えば二〇〇六年一月のライブドア事件を「若い経営者が犯した失敗」と見るか、「経団連の若い芽潰し」とか「検察と亀井静香の陰謀」とか「反日サヨク新聞と北朝鮮の罠」などとして見るかは、個人の主観（つまり「好み」）よりほかに決定の要因をもたないこととなる。

木原善彦は『UFOとポストモダン』『平凡社新書

二〇〇六』で、「UFO神話」を事例として、

以前なら、一般に前提される、ある一つの「現実」に対して複数の「個人的価値観」が存在していましたが、現在はそれとは逆に、「個人的価値観」に基づいて各人が自分の好きな「現実」を選び取っているとと言えるかもしれません。「同…一八七〜八」

と現在の状況をまとめ、こうした心性の広まった現在を大澤真幸のいう「不可能性の時代」、東浩紀のいう「動物の時代」を参照しつつ、「諸現実の時代」と名付けている。

こうした背景を持つ現行の「都市伝説」ブームを、二一世紀のメディア社会において口承文芸が不滅である証拠、などと安穩に捉えるわけにはいかないだろう。

「都市伝説」が商品として世間に流通する一方で、日本口承文芸学会編「ことばの世界」第三巻『はなす』『三弥井書店

二〇〇七』が「現代伝説」の語を採用しているように、口承文芸研究者は「都市伝説」の語と距離をおく傾向にある。これはかつての「民話」と「昔話」の相克を思わせる。

さらに「現代民話」や「学校の怪談」のブーム、「実話怪談」や「Jホラー」の流行も、「都市伝説」と密接な関連をもつものであるが、これらについては稿を改めて論じたい。

（いいくら・よしゆき／國學院大學大学院特別研究生）